タイトル『何もかも憂鬱な夜に』

著者：中村文則　　出版社：集英社

この本は刑務官の主人公が、夫婦を殺害した二十歳の死刑囚を担当していく中で、自分に似たものを感じたり、自殺した親友のこと、大切な恩師とのやりとりを思い出し、自分の中の気持ち、生と死についてを描いている本です。

また、死刑制度についても語っていて、主人公の「人間と、その人間の命は、別のようなものだと思うから…。」というセリフが心に残りました。死刑制度から、人の命の意味と罪とを関連づけたこのセリフは、みなさんにも読んで様々な気持ちをもっていただければなぁと思います。

投稿日 2019 年 2 月 7 日

ペンネーム（本名は書かないでね！）	年齢
ゆう	17

仙台市　市民　図書館　YAコーナー